

桜花賛

冰心

(訳 富永涓子)

桜の花は日本の誇りだ。日本へ行く人は、行く前に先ず桜の花を思い起こし、着いてからは、何よりも桜の花について会話する。あなたがもし夏や秋に行くとする、日本の友達は同情して、「あなたは桜の花の季節を逃しましたね！」と言い、もし冬に行ったとしたら引き止めて、「何日か滞在して、桜の花を見てから帰りなさいよ！」と言うだろう。要するに、桜の花は“雪を頂いた霊峰”富士山と同じように、日本の象徴となっているのだ。

私が桜の花を見たのは、少なくとも数十回にもなる。東京の青山墓地で、上野公園で、千鳥が淵で……また京都でも奈良でも見たし……雨の中で、霧の中で、月の下で……。日本には至るところに桜の花があり、あるところでは何百本もの樹が一斉に花をつけ、あるところでは一、二本の花の木がひっそりと水辺の傍らの路に^{たたず}佇んでいる。春になると日本では一面に桜の花が咲き広がって花の息吹に満ち溢れてくるのだ！。

日本の友達が教えてくれたところによると、桜の花は全部で三百以上の種類があり、最も多いのは山桜、染井吉野、そして八重桜だそうである。山桜と染井吉野は桃の花のように^{あか}紅みのさした白ではなくて、梨の花のように緑色がさしている白でもなく、それは蓮のような灰色。八重桜はそれこそ艶やかな紅で、北京の春の^{かいどう}海棠に近い。このほかにも浅黄色のウコン桜、枝が低く垂れ下がっているしだれ桜、春分の頃一番早く咲くのは彼岸桜、花弁が三百以上もたくさんある菊桜……あでやかさ、なまめかしさを競い合って重なり、おぼろげに目にうつる。清の詩人黄遵憲が桜を詠んだ歌の中に、

.....
隅田川に緑のさざ波 打ち寄せて
花々引き立て合い 入り江を覆う
町中花を愛でたく 如何せん
人々うちそろい 桜の花の歌を うたう

.....
花は光って海を照らし 影は浸^{しみ}たる
男たちは 多く集い

.....
十日の遊び 国を挙げて狂う
年年歳歳 喜びと憂いは繰り返される

.....
というのがある。

この歌は日本人が春になり桜の花見で国中が狂ったように喜ぶ様子を歌いつくしている。

「十日の遊び」とはその短いはかなさであり、曇り空の続いた後、春の陽気が急にきて、桜の花は野にも山にも至るところで咲き出し、ひとたび風雨に遭うと、またたく間にしぼんで散ってしまい、野山は散り落ちた花びらで覆われる。日本の文人はこのために「短い人生」を、もの寂しくなげく詩歌を多く書き表し、桜の花の特徴は「咲くのも早く散るのも早い」ところにあるといわれている。

私が中国人だからなのか、桜に対する連想は、それほど暗くはない。しかし、思い起こせば、1947年の春、初めて東京の青山墓地で桜の花を見た時、墓地の中は憂鬱そうにうつむき加減で墓参をする人ばかり、その中で酒を飲みすぎ大声を上げ悲しく歌をうたう酔客もいて、私はアーチ形になった蓮灰色の花で覆われた石畳の小路を通り抜ける時、一種低く沈んだ感覚を感じさせられたものだった。

今年の春日本に行ったのは、ちょうど桜の花が満開の季節で、至るところで桜の花を見た、東京、大阪、京都、箱根、鎌倉……で、しかし4月13日金沢夢香山の上で見た桜の花はどこよりも、最もきらきらと光り、^{おごそ}厳かな輝く光を放っていたのだった！

4月12日、大雨の下、私達は金沢市から近い^{うちなだ}内灘の漁村を訪問した。途中偶然にも明日は金沢市のタクシー会社では従業員がストライキをする日で、金沢市には12のタクシー会社、250台のタクシーがあり、数百人の運転手と従業員を雇用しているということを聞いた。

彼らは生活が苦しいため、給料の増額を要求し、既に5回のストをしたが、未だ目的が達せられず、明日のストは第6回になるそうだ。

その日の午後、私達は大雨の中、砂浜で、内灘の農民の家で、かつて米軍が農地を占領して射撃場を作るのに対し、多くの農工民の群集が反対闘争を起こし、ついに勝利を得たという、称賛される、感動的な様々な事柄を聞いたのだった。又夜には群衆の熱烈な歓迎会に参加し、みんなは興奮してよく眠れなかった。次の日は早く起きて、そそくさと出発の支度をし、わたしは今日がタクシー運転手のストだという事情を、すっかりはるか彼方のほうに忘れしまっていた。

早朝8時40分、私達が旅館を出ると、11両のタクシーが整然と門の入り口に並んでいた。

私達は分かれて車に乗り、ゆっくりと山道に沿って、曲がりくねって下って行った。天気は快晴で、暖かい春の風が吹き、きらきらと輝く太陽が目にもまぶしかった……。

この時、私は突然思い出した、今日はタクシー運転手達のストライキの日ではなかったか？

彼らのスト開始時間は早朝8時開始ではなかったか？ 私達を乗せるために、彼らはストの時間をおくらせたのか？ 私はあわてて、前で運転手と坐っている日本の友人に仔細を尋ねた。友達は振り向き微笑みながら

話した。中国の作家代表団を駅までお送りするために、彼らは昨晚緊急の会議を開いて、ストの時間を9時開始に変更することを決めたのだと！私が感動してお礼の言葉を言おうとすると、落ち着いて前をじっと見ていた運転手がそっと頭をかたむけて控えめな態度で言った。「日中の人々の友好を進める、これもまた闘争の一部ですよ」と。

私の心は突然跳び上がり、まるで火のついた花火のように、心の底から噴き出した感激が、空一面に光り輝く火花となった……。

早朝の山道には他の車はなく、ただ私たちの11両のタクシーだけがサーサーと飛ぶように走っていた。この時私が突然目にしたのは、山道の両側を取り囲んでいる、雨のあとで満開に咲いた何百、何千樹もの桜の花だった！桜の花は何重、何層にも重なってまるで雲海のように、朝日の下、真紅に広がり、光あふれていた。この果てしない花の雲に覆われた山道を曲がり折れる時、わたし達はまるで、つながっている11艘そうの小舟に乗って、のどかに吹く春風の中、船べりにザアザアと跳ね上がる花の波を受け、昇る太陽に向かってつき進んで行くかのようだった！

山を下りて町の中心に着くと、やはり町には走っているタクシーは見当たらず、ただ町のかたわらにあるいくつかのタクシー会社を見ると、大きな門を開け放した中に大小のタクシーが並び、入り口には大きな赤旗が挿されていて、従業員たちが門の脇に整然と立って、微笑をもってわたし達一行の通過を見送っていた。

駅に着き、わたし達は車を下りて、胸一杯に湧き上がる熱意を持って運転手の手を、手伝ってくれたことに感謝し、かれらの闘争の勝利を祈ってしっかりと固く握った。

心が熱くなる別れのシーンは過ぎ去って、汽車は長い間走り、連綿と続く雪山と激しく流れる雪解けの水が車窓をかすめていたのだが、私のまぶた瞼に今なお映っているそのひとこまは、今まで見たこともなかった、あのまれに見る美しい桜の花なのだった！

わたしは振り返って、同行している日本の友人に「桜の花の美しさは言うまでもないことだが、日本人からすると、その美しさはどこにあるのでしょうか？」と聞いてみると、彼は頭をかいて笑いながら「世界中に美しくない花はありません……その中で一つの花を愛^めでることは、それぞれ各人の感銘の受け方によるものです。日本の文人は、あっという間に散ってしまう桜の花の美しさから人生のはかなさを、武士たちは、壮烈に生命をなげうつ崇高さを感じ取ったのです。一般の人々にとって、桜の花が好きなのは、厳しい冬が過ぎて、真っ先に春になった喜びをもたらしてくれるからです。日本では桜の花はとても多いのです！ 山の上、水辺、街々、庭などいたるところにあります。積雪がまだ融けず冬服が脱げなくて、ほの暗い部屋の中で春先の厳しい寒さに震えていると、はるか遠くからかすかに東風が吹いて来て、空から陽がさし、桜の花が野にも山にも至る所に咲き出すのです！ 山桜でも、染井吉野でも、八重桜でもよく……日本全国津々浦々の人々に向かって、生き生きとした奮い立つ春の気配が伝えられるのです」と話した。

この話は、わたしに二つのことを明らかにしてくれた。一つは、日本全土にくまなく咲く桜の花は日本人自身の花で、永遠に日本の人々に春の喜びと興奮をもたらすこと。もう一つは花をみる人の心を動かしているのは、これらの花に対しての特別な愛情によるものであるということ。金沢の桜は、決して別のところよりも美しいわけではない。タクシー運転手の一言には心がこもり、日本の労働者が抱いている中国の人々に対しての深い友情を表し、わたしの^{まぶた} 瞼には金沢の山を覆いつくしていた桜の花が広がり、幻想的なその光景は友情の雲海となり、友情の小舟となって、矢のように、きらきらと輝く朝日に向かって前進したのだった！

深夜になって思い出すと、心は温かさで満ち溢れ、喜びに震えて「桜花賛」の筆をとった。

1961年5月18日夜

.....
謝冰心(1900-99):福建省出身。中国近代文学における代表的な作家。

本訳に使用したテキスト:『冰心散文』,北京,人民文学出版社,2005, pp.27-28.



(中国語原文) **櫻花贊** 冰 心

櫻花是日本的骄傲。到日本去的人,未到之前,首先要想起櫻花;到了之后,首先要谈到櫻花。你若是在夏秋之间到达的,日本朋友们会很惋惜地说:“你错过了櫻花季节了!”你若是在冬天到达的,他们会挽留你说:“多呆些日子,等看过櫻花再走吧!”总而言之,櫻花和“瑞雪灵峰”的富士山一样,成了日本的象征。

我看櫻花,往少里说,也有几十次了。在东京的青山墓地看,上野公园看,千鸟渊看……;在京都看,奈良看……;雨中看,雾中看,月下看……日本到处都有櫻花,有的是几百棵花树拥在一起,有的是一两棵花树在路旁水边悄然独立。春天在日本就是沉浸在弥漫的櫻花气息里!

我的日本朋友告诉我,櫻花一共有三百多种,最多的是山櫻,吉野櫻,和八重櫻。山櫻和吉野櫻不像桃花那样地白中透红,也不像梨花那样地白中透绿,它是莲灰色的。八重櫻就丰满红润一些,近乎北京城里春天的海棠。此外还有浅黄色的郁金櫻,花枝低垂的枝垂櫻,“春分”时节最早开花的彼岸櫻,花瓣多到三百余片的菊櫻……呆映重叠,争妍斗艳。清代诗人黄遵宪的櫻花歌中有:

“.....

墨江泼绿水微波
万花掩映江之沱
倾城看花奈花何

人人同唱樱花歌

.....

花光照海影为渐

游侠聚作萃渊藪

.....

十日之游举国狂

岁岁欢虞朝复暮

.....”

这首歌写尽了日本人春天看樱花的举国若狂的盛况。“十日之游”是短促的，连阴之后，春阳暴暖，樱花就漫山遍地的开了起来，一阵风雨，就又迅速地凋谢了，漫山遍地又是一片落英！日本的文人因此写出许多“人生短促”的凄凉感喟的诗歌，据说樱花的特点也在“早开早落”上面。

也许因为我是个中国人，对于樱花的联想，不是那么灰黯。虽然我在一九四七年的春天，在东京的青山墓地第一次看樱花的时候，墓地里尽是一些阴郁的低头扫墓的人，间以喝多了酒引吭悲歌的醉客，当我穿过园穹似地莲灰色的繁花覆盖的甬道的时候，也曾使我起了一阵低沉的感觉。

今年春天我到日本，正是樱花盛开的季节，我到处都看了樱花，在东京，大阪，京都，箱根，镰仓……但是四月十三日我在金泽萝香山上所看到的樱花，却是我所看过的最璀璨，最庄严的华光四射的樱花！

四月十二日，下着大雨，我们到离金泽市不远的内滩渔村去访问。路上偶然听说明天是金泽市出租汽车公司工人罢工的日子，金泽市有十二家出租汽车公司，有汽车二百五十辆，雇用着几百名的司机和工人。他们为了生活的压迫，要求增加工资，已经进行过五次罢工了，

还没有达到目的，明天的罢工将是第六次。

那个下午，我们在大雨的海滩上，和内滩农民的家里，听到了许多工农群众为反对美军侵占农田作打靶场奋起斗争终于胜利的种种可泣可歌的事迹。晚上又参加了一个情况热烈的群众欢迎大会，大家都兴奋得睡不好觉。第二天早起，匆匆地整装出发，我根本把今天汽车司机罢工的事情，忘在九霄云外了。

早晨八点四十分，我们从旅馆出来，十一辆汽车整整齐齐地摆在门口。我们分别上了车，徐徐地沿着山路，曲折而下。天气晴朗，和煦的东风吹着，灿烂的阳光晃着我们的眼睛……

这时我才忽然想起，今天不是汽车司机们罢工的日子么？他们罢工的时间不是从早晨八时开始么？为着送我们上车，不是耽误了他们的罢工时刻么？我连忙向前面和司机同坐的日本朋友询问究竟。日本朋友回过头来微微地笑说：“为着要送中国作家代表团上车站，他们昨夜开了个紧急会议，决定把罢工时间改为从早晨九点开始了！”我正激动着要说一两句道谢的话的时候，那位端详稳重、目光注视着前面的司机，稍稍地侧着头，谦和地说：“促进日中人民的友谊，也是斗争的一部分啊！”

我的心猛然地跳了一下，像点着的焰火一样，从心灵深处喷出了感激的漫天灿烂的火花……

清晨的山路上，没有别的车辆，只有我们这十一辆汽车，沙沙地飞驰。这时我忽然看到，山路的两旁，簇拥着雨后盛开的几百树几千树的樱花！这樱花，一堆堆，一层层，好像云海似地，在朝阳下绯红万顷，溢彩流光。当曲折的山路被这无边的花云遮盖了的时候，我们就像坐在十一只首尾相接的轻舟之中，凌驾着骀荡的东风，两舷溅起哗哗的花浪，迅捷地向着初升的太阳前进！

下了山，到了市中心，街上仍没有看到其他的行驶的车辆，只看到街旁许多的汽车行里，大门敞开着，门内排列着大小的汽车，门口

插着大面的红旗，汽车工人们整齐地站在门边，微笑着目送我们这一行车辆走过。

到了车站，我们下了车，以满腔沸腾的热情紧紧地握着司机们的手，感谢他们对我们的帮忙，并祝他们斗争的胜利。

热烈的惜别场面过去了，火车开了好久，窗前拂过的是连绵的雪山和奔流的春水，但是我的眼前仍旧辉映着这一片我所从未见过的奇丽的樱花！

我回过头来，问着同行的日本朋友：“樱花不消说是美丽的，但是从日本人看来，到底樱花美在哪里？”他搔了搔头，笑着说：“世界上没有不美的花朵……至于对某一种花的喜爱，却是由于各人心中的感触。日本文人从美而易落的樱花里，感到人生的短暂，武士们就联想到捐躯的壮烈。至于一般人民，他们喜欢樱花，就是因为它在凄厉的冬天之后，首先给人民带来了兴奋喜乐的春天的消息。在日本，樱花就是多！山上、水边、街旁、院里，到处都是。积雪还没有消融，冬服还没有去身，幽暗的房间里还是春寒料峭，只要远远地一丝东风吹来，天上露出了阳光，这樱花就漫山遍地的开起！不管是山樱也好，吉野樱也好，八重樱也好……向它旁边的日本三岛上的人民，报告了春天的振奋蓬勃的消息。”

这番话，给我讲明了两个道理。一个是：樱花开遍了蓬莱三岛是日本人民自己的花，它永远给日本人民以春天的兴奋与鼓舞；一个是看花人的心理活动，形成了对于某些花卉的特别喜爱。金泽的樱花，并不比别处的更加美丽。汽车司机的一句深切动人的、表达日本劳动人民对于中国人民的深厚友谊的话，使得我眼中的金泽的漫山遍地的樱花，幻成一片中日人民友谊的花的云海，让友谊的轻舟，激箭似地，向着灿烂的朝阳前进！

深夜回忆，暖意盈怀，欣然提笔作樱花赞。

□□□□□